

白居易「醉」詩初探

前川幸雄

一 序言

白居易は、中唐の政治家であり、詩人であった。代宗の大曆七年（七七二）に生まれ、武宗の会昌六年（八四六）七十五歳で没した。彼は、唐代の詩壇を代表する盛唐の李白、杜甫、中唐の韓愈と並び称せられた。中唐を代表すると同時に、中国を代表する四大詩人の一人であった。

また、彼は、酒についての詩を多く作った詩人としても有名である。そして、開成三年六十七歳、洛陽において、自らの伝記「醉吟先生伝」を作ったのである。

そこで、唐代の詩の収録率が高い、明代の張之象が編纂した『唐詩類苑』（注1）をみてみる。第八十六卷、「人」部の「醉」の項目には、三十四人の「醉」を詠った作品百二十三篇が収められている。その状況は氏名の初出順に記すと以下のようになっている。（一）内は合計した作品数である。一首のみの作家は作品数を示さないで氏名だけを記す。

李白（7）、元稹（18）、白居易（42）、韓愈（3）、張為、張說、岑參（2）、王績、孟浩然、司空圖、韋応物、盧全、裴櫛

然、朱彬、杜牧（7）、馬異、許渾、李商隱（3）、丁仙芝、杜甫（4）、元結、許宣平、李涉、溫庭筠、独孤及、盧綸、許碯、陸龜蒙（5）、皮日休（6）、李穀、張賁（3）、韓偓、劉駕、于鵠。

右の中、二首以上収められている詩人は、多い順に上げると、白居易（42）、元稹（18）、李白（7）、杜牧（7）、皮日休（6）、陸龜蒙（5）、杜甫（4）、韓愈（3）、李商隱（3）、張賁（3）、岑參（2）である。右の通り、白居易、元稹が他を圧倒している。

そこで、白居易の一連の作品を、彼の詩文集『白氏文集』をテキストとして（注2）、白居易の作品制作の状況、目的、「醉」を通じて示されるその時々的心情、また、作品の表現上の特徴とはどのようなものか等を研究してみようと思う。

二 作品研究

二、一 研究方法

本稿では、『唐詩類苑』に収める白居易の四十二首の作品を、

制作年代の順に検討する。

まず、全作品の、表題・篇名、作品番号、原詩、その書き下し文、詩体、制作年、年齢、制作場所、地位、を示す。(なお、篇名の次にあげる「」内の語句は題注である。)(注3)

次に、それぞれの作品について、①制作の状況と目的、②表現されている心情、③表現上の特徴、について、まとめて検討することとしたい。

二、二 作品の検討

1 縣南花下、醉中留劉五。 0640

縣南花下、醉中劉五を留む。

百歳幾廻同酩酊？百歳幾廻か酩酊を同じうする？

一年今日最芳菲 一年今日最も芳菲。

願將花贈天台女 願はくは花を將つて天台の女に贈り、

願取劉郎到夜歸 劉郎を留取して夜に到つて歸らしめん。

○七言絶句 元和二年 三六歳(八〇七) 整屋 整屋県尉

2 醉中留別楊六兄弟。「三月二十日別」 0642

醉中楊六兄弟に留別す。「三月二十日に別る」

春初攜手春深散 春初に手を攜へて春深けて散じ、

無日花間不醉狂 日として花間に醉狂せざるは無し。

別後何人堪共醉？別後何人か共に醉ふに堪へん？

猶殘十日好風光 猶殘る十日の好風光。

○七言絶句 元和二年(八〇七) 三六歳 長安 整屋県尉

3 醉中婦整屋。 0643

醉中整屋に婦る。

金光門外昆明路 金光門外昆明の路、

半醉騰騰信馬廻 半醉騰騰として馬に信せて廻る。

數日非關王事繫 數日王事の繫に關るに非ず、

牡丹花盡始歸來 牡丹花盡きて始めて歸り來る。

○七言絶句 元和二年(八〇七) 三六歳 整屋 整屋県尉

4 醉後走筆酬劉五主簿長句之贈。兼簡張大・賈二十四先輩昆季。 0584

醉後筆を走らせて劉五主簿が長句の贈に酬い、兼ねて張

大・賈二十四先輩昆季に簡す。

1 劉兄文高行孤立 劉兄文高うして行孤立す、

2 十五年前名翁習 十五年前名翁習。

3 是時相遇在符離 是時相遇うて符離に在り、

4 我年二十君三十 我年二十君は三十。

5 得意忘年心迹親 意を得年を忘れて心迹親む、

6 寓居同縣日知聞 同縣に寓居して日に知聞す。

7 衡門寂寞朝尋我 衡門寂寞として朝に我を尋ね、

8 古寺蕭條暮訪君 古寺蕭條として暮に君を訪ふ。

9 朝來暮去多攜手 朝來暮去多くは手を攜ふ、

10 窮巷貧居何所有？窮巷貧居何の有る所ぞ？

11 秋燈夜寫聯句詩 秋燈夜寫す聯句の詩、

12 春雪朝傾煖寒酒 春雪朝に傾く煖寒の酒。

13 陣湖綠愛白鷗飛 陣湖緑にして白鷗の飛ぶを愛し、

- 14 澠水清憐紅鯉肥 澠水清うして紅鯉の肥ゆるを憐む。
 15 偶語閑攀芳樹立 偶語して閑に芳樹を攀ちて立ち、
 16 相扶醉踏落花歸 相扶けて酔うて落花を踏んで歸る。
 17 張賈兄弟同里巷 張賈兄弟里巷を同じうし、
 18 乘閑數數來相訪 閑に乗じて數數來りて相訪ふ。
 19 雨天連宿草堂中 雨天連りに宿草堂の中、
 20 月夜徐行石橋上 月夜徐に行く石橋の上。
 21 我年漸長忽自驚 我年漸く長じて忽ち自ら驚く、
 22 鏡中冉冉鬢生 鏡中冉冉として鬢生ず
 23 心畏後時同勵志 心時に後れんことを畏れて同じく志を勵まし、
- 24 身牽前事各求名 身前事に牽かれて各々名を求む。
 25 問我棲棲何所適 我に問ふ棲棲として何くに適く所ぞ、
 26 鄉人薦為鹿鳴客 鄉人薦めて鹿鳴の客と為す。
 27 二千里別謝交遊 二千里の別交遊に謝し、
 28 三十韻詩慰行役 三十韻の詩行役を慰す。
 29 出門可憐唯一身 門を出でて憐むべし唯一身、
 30 弊裘瘦馬入咸秦 弊裘瘦馬咸秦に入る。
 31 鑿鑿街鼓紅塵闌 鑿鑿たる街鼓紅塵闌く、
 32 晚到長安無主人 晚に長安に到れば主人無し。
 33 二賈二張與余弟 二賈二張と余が弟と、
 34 驅車遷迤來相繼 車を驅り遷迤として來り相繼ぐ。
 35 操詞握賦爲干戈 詞を操り賦を握つて干戈と爲す、
 36 鋒銳森然勝氣多 鋒銳森然として勝氣多し。
 37 齊人文場同苦戰 齊しく文場に入つて同じく苦戰し、

- 38 五人十載九登科 五人十載九たび登科す。
 39 二張得薦名居甲 二張薦を得て名甲に居り、
 40 美退爭雄重告捷 美退雄を争うて重ねて捷を告ぐ。
 41 棠棣輝榮竝桂枝 棠棣輝榮して桂枝に竝び、
 42 芝蘭芬馥和荊葉 芝蘭芬馥して荊葉に和す。
 43 唯有沅犀屈未伸 唯沅犀の屈して未だ伸びざる有り、
 44 握中自謂駭鷄珍 握中自ら駭鷄の珍と謂ふ。
 45 三年不鳴鳴必大 三年鳴かず鳴げば必ず大なり、
 46 豈獨駭鷄當駭人 豈に獨鷄を駭かすのみならんや當に人を駭かすべし。
- 47 元和運啓千年聖 元和の運は啓く千年の聖、
 48 同遇明時余最幸 同じく明時に遇うて余最も幸せらる。
 49 始辭秘閣吏王畿 始め秘閣を辭して王畿に吏たり、
 50 遽列諫垣升禁闈 遽に諫垣に列つて禁闈に升る。
 51 蹇步何堪鳴珮玉？蹇步何ぞ珮玉を鳴らすに堪へん？
 52 衰容不稱著朝衣 衰容朝衣を著くるに稱はず。
 53 闈闈晨開朝百辟 闈闈晨に開いて百辟を朝す、
 54 兔旒不動香煙碧 兔旒動かず香煙碧なり。
 55 步登龍尾上虛空 歩して龍尾に登つて虚空に上る、
 56 立去天顏無咫尺 立つて天顔を去ること咫尺無し。
 57 宮花似雪從乘輿 宮花雪に似て乘輿に従ひ、
 58 禁月如霜坐直廡 禁月霜の如くにして直廡に坐す。
 59 身賤每驚隨內宴 身賤しうして毎に驚く内宴に隨ふを、
 60 才微常愧草天書 才微にして常に愧づ天書を草するを。
 61 晚松寒竹新昌第 晚松寒竹新昌の第、

- 62 職居密近門多閉 職密近に居りて門多くは閉つ。
 63 日暮銀臺下直迴 日暮れて銀臺直より下つて迴る、
 64 故人到門門暫開 故人門に到つて門暫く開く。
 65 迴頭下馬一相顧 頭を迴らし馬を下りて一たび相顧みれば、
 66 塵土滿衣何處來？ 塵土衣に滿ちて何の處より來る？
 67 歛手炎涼絃未畢 手を歛めて炎涼絃へて未だ畢らず、
 68 先說舊山今悔出 先づ舊山を説き今出でしを悔ゆ。
 69 岐陽旅宦少歡娛 岐陽の旅宦歡娛少く、
 70 江左の羈遊時日を費す。
 71 贈我一篇行路吟 我に一篇の行路吟を贈る、
 72 吟之句句披沙金 之を吟ずれば句句沙金を披く。
 73 歲月徒催白髮貌 歲月徒に催す白髮の貌、
 74 泥塗不屈青雲心 泥塗屈せず青雲の心。
 75 誰會茫茫天地意？ 誰か會せん茫茫たる天地の意を？
 76 短才獲用長才棄 短才は用ひらるるを獲長才は棄てらる。
 77 我隨鷓鴣入煙雲 我は鷓鴣に隨つて煙雲に入り、
 78 謬上丹墀爲近臣 謬つて丹墀に上つて近臣と爲る。
 79 君同鸞鳳棲荆棘 君は鸞鳳の荆棘に棲むに同じく、
 80 猶著青袍作選人 猶青袍を着て選人を作る。
 81 惆悵知賢不能薦 惆悵す賢を知つて薦むる能はざるを、
 82 徒爲出入蓬萊殿 徒に出入を爲す蓬萊の殿。
 83 月慚づ諫紙二百張 月慚づ諫紙二百張、
 84 歲愧づ俸錢三十萬 歲愧づ俸錢三十萬。
 85 大底浮榮何足道 大底浮榮何ぞ道ふに足らん、
 86 幾度相逢即身老 幾度か相逢うて即ち身老ゆ。

- 87 且傾斗酒慰羸愁 且く斗酒を傾けて羸愁を慰す、
 88 重話符離問舊遊 重ねて符離を話して舊遊を問ふ。
 89 北巷鄰居幾家去 北巷の鄰居幾家か去る、
 90 東林舊院何人住？ 東林の舊院何人か住する？
 91 武里村花落復開 武里の村花落ちて復開き、
 92 流溝山色應如故 流溝の山色應に故の如くなるべし。
 93 感此酬君千字詩 此を感じて君に酬ゆ千字の詩、
 94 醉中分手又何之？ 醉中手を分ちて又何くにか之く？
 95 須知通塞尋常事 須く知るべし通塞尋常の事、
 96 莫歎浮沈先後時 歎くこと莫れ浮沈先後の時。
 97 慷慨臨岐重相勉 慷慨岐に臨んで重ねて相勉む、
 98 殷勤別後加餐飯 殷勤に別後餐飯を加へよ。
 99 君不見 買臣衣錦還故郷 君見ずや 買臣錦を衣て故郷に還るを、
 100 五十身榮未爲晚！ 五十にして身榮ゆるも未だ晚しと爲さず！
 ○七言古詩 元和四年（八〇九） 三八歲 長安 左拾遺 翰林學士
- 5 同李十一醉憶元九。 0710
 李十一と同じく酔うて元九を憶ふ。
 花時同醉破春愁 花時同醉春愁を破る、
 醉折花枝當酒籌 酔うて花枝を折りて酒籌に當つ。
 忽憶故人天際去 忽ち憶ふ故人天際に去るを、
 計程今日到梁州 程を計るに今日梁州に到らん。
 ○七言絕句 元和四年（八〇九） 三八歲 長安 左拾遺

6 曲江醉後贈諸親故。 0831

曲江にて醉後諸々の親故に贈る。

郭東丘墓何年客 郭東の丘墓は何の年の客ぞ、
江畔風光幾日春？ 江畔の風光は幾日か春なる？
只合殷勤逐盃酒 只合に殷勤に盃酒を逐ふべし、
不須疎索向交親 須ひず疎索にして交親に向ふを。
中天或有長生藥 中天或は長生の藥あらん、
下界應無不死人 下界應に不死の人なかるべし。
除却醉來開口笑 醉ひ來りて口を開いて笑ふを除却せば、
世間何事更關身？ 世間何事か更に身に關らん？

○七言律詩 元和十年（八一五） 四四歲 長安

太子左贊善大夫

7 醉後却寄元九。 0836

醉後元九に却寄す。

蒲池村裏匆匆別 蒲池村裏匆匆として別れ、
澧水橋邊兀兀回 澧水橋邊兀兀として回る。
行到城門殘酒醒 行きて城門に到れば殘酒醒め、
萬重離恨一時來 萬重の離恨一時に來る。

○七言絕句 元和十年（八一五） 四四歲 長安

太子左贊善大夫

8 醉中戲贈鄭使君。 0988

醉中戲に鄭使君に贈る。

「時に使君先づ歸り、妓樂を留めて重ねて飲ましむ」
密座移紅毯 密座紅毯を移し、
醜顏照綠杯 醜顏綠杯を照らす。
雙娥留且住 雙娥留めて且く住め、
五馬任先迴 五馬任に先づ廻る。
醉耳歌催醒 醉耳歌醒を催し、
愁眉笑引開 愁眉笑開を引く。
平生少年興 平生少年の興、
臨老暫重來 老に臨んで暫く重ねて來る。
○五言律詩 元和十二年（八一七） 四六歲 江州
江州司馬

9 醉吟二首（その一） 1064

醉吟二首（その一）

空王百法學未得 空王の百法學ぶこと未だ得ず、
蛇女丹砂燒即飛 蛇女丹砂燒けば即ち飛ぶ。
事事無成身老也 事事成るなくして身老いたり、
醉癡不去欲何歸？ 醉癡に去らずして何に歸せんと欲する？

○七言絕句 元和十三年（八一八） 四七歲 江州

江州司馬

10 醉吟二首（その二） 1065

醉吟二首（その二）

兩鬢千莖新似雪 兩鬢の千莖、新、雪に似、
十分一盞欲如泥 十分の一盞泥の如くならんと欲す。

酒狂又引詩魔發 酒狂又詩魔を引いて發す、
日午悲吟到日西 日午悲吟して日の西するに到たる。

○七言絶句 元和十三年（八一八） 四七歳 江州

江州司馬

11 東樓醉 1143

東樓に醉ふ

天涯深峽無人地 天涯深峽人無き地、
歲暮窮陰欲夜天 歲暮れて窮陰夜ならんと欲する天。

不向東樓時一醉 東樓に向ひて時に一醉せずんば、
如何擬過二三年？ 如何ぞ二三年を過さんと擬せん？

○七言絶句 元和十四年（八一九） 四八歳 忠州

忠州刺史

12 醉後戲題。 1146

醉後戲に題す。

自知清冷似冬凌 自ら知る清冷冬凌に似たるを、
每被人呼作律僧 毎に人に律僧と呼び作さる。

今夜酒醺羅綺暖 今夜酒醺して羅綺暖かに、
被君融盡玉壺冰 君に融盡せらる玉壺の冰。

○七言絶句 元和十四年（八一九） 四八歳 忠州

忠州刺史

13 醉後贈人。 1174

醉後人に贈る。

香毬趁拍迴環匝 香毬をば趁ひ拍ちて迴環して匝ふ、
花盞拋巡取次飛 花盞抛ち巡りて取次に飛ぶ。
自入春來未同醉 春に入りてより來た未だ同く醉はず、
那能夜去獨先歸？ 那ぞ能く夜去りて獨先づ歸らん？

○七言絶句 元和十五年（八二〇） 四九歳 忠州

忠州刺史

14 醉後 1224

醉後

酒後高歌且放狂 酒後高歌し且つ放狂す、
門前閑事莫思量 門前の閑事思量すること莫れ。

猶嫌小戸長先醒 猶嫌ふ小戸の長く先づ醒め、
不得多時住醉郷 多時醉郷に住むを得ざるを。

○七言絶句 長慶一年（八二二） 五十歳 長安

主客郎中 知制誥

15 醉後狂言。酬贈蕭・殷二協律。 0606

醉後に狂言し、蕭・殷二協律に酬贈す。

- 1 餘杭邑客多羸貧 餘杭の邑客羸貧多し、
- 2 其間甚者蕭與殷 其間甚しき者は蕭と殷と。
- 3 天寒身上猶衣葛 天寒うして身上猶葛を衣、
- 4 日高甌中未拂塵 日高うして甌中未だ塵を拂はず。
- 5 江城山寺十一月 江城山寺十一月、
- 6 北風吹砂雪紛紛 北風砂を吹いて雪紛紛。
- 7 賓客不見締袍惠 賓客不見締袍の惠を見ず、

8 黎庶未霑襦袴恩 黎庶未だ襦袴の恩に霑はず。

9 此時太守自慚愧 此時太守自ら慚愧す、

10 重衣複衾有餘温 重衣複衾餘温あり。

11 因命染人與針女 因つて染人と針女とに命じ、

12 先製兩裘贈二君 先づ兩裘を製して二君に贈る。

13 吳綿細軟桂布密 吳綿は細軟にして桂布は密なり、

14 柔如狐腋白似雲 柔なること狐腋の如く白きこと雲に似たり。

15 勞將詩書投贈我 勞ふに詩書を將てし我に投贈す、

16 如此小惠何足論 此の如き小惠何ぞ論ずるに足らん？

17 我有大裘君未見 我に大裘あり君未だ見ず、

18 寬廣和暖如陽春 寬廣和暖陽春の如し。

19 此裘非繒亦非纊 此裘は繒に非ず亦纊に非ず、

20 裁以法度絮以仁 裁するに法度を以てし絮は仁を以てす。

21 刀尺鈍拙製未畢 刀尺鈍拙にして製未だ畢らず、

22 出亦不獨裹一身 出づれば亦獨一身を裹むのみならず。

23 若令在郡得五考 若し郡に在りて五考を得しめば、

24 與君展覆杭州人 君と展覆せん杭州の人を。

杭州刺史

○七言古詩 長慶二年（八二二） 五一歲

16 醉歌 「示妓人商玲瓏」 0607

醉歌 「妓人商玲瓏に示す」

罷胡琴 掩秦瑟 胡琴を罷め、秦瑟を掩ふ。

玲瓏再拜歌初畢 玲瓏再拜して歌初めて畢る。

誰道使君不解歌 誰か道ふ使君歌を解せずと？

聽唱黃鸝與白日 黃鸝と白日とを唱するを聽け。

黃鸝催曉丑時鳴 黃鸝は曉を催して丑時に鳴き、

白日催年酉時沒 白日は年を催して酉時に沒す。

腰間紅綬繫未穩 腰間の紅綬繫くれども未だ穩ならず、

鏡裏朱顏看已失 鏡裏の朱顏看すみす已に失す。

玲瓏玲瓏奈老何 玲瓏玲瓏老を奈何せん！

使君歌了汝更歌 使君歌ひ了らば汝更に歌へ。

○七言古詩 長慶三年（八二三） 五二歲 杭州 杭州刺史

17 候仙亭同諸客醉作。 1352

候仙亭にて諸客と同じく酔うて作る。

謝安山下山携妓 謝安は山下に空しく妓を携へ、

柳惲洲邊只賦詩 柳惲は洲邊に只詩を賦す。

爭及湖亭今日會 爭でか湖亭今日の會に及かん、

嘲花詠水贈蛾眉 花を嘲り水を詠じて蛾眉に贈る。

○七言絕句 長慶三年（八二三） 五二歲 杭州 杭州刺史

18 醉中酬殷協律。 1368

醉中殷協律に酬ゆ。

泗水城邊一分散 泗水城邊一たび分散し、

浙江樓上重遊陪 浙江樓上に重ねて遊陪す。

揮鞭二十年前別 鞭を揮ひて二十年前に別れ、

命駕三千里外來 駕を命じて三千里外に来る。

醉袖放狂相向舞 醉袖狂を放にして相向ひて舞ひ、

愁眉和笑一時開 愁眉笑に和して一時に開く。

留君夜住非無分 君を留めて夜住せしむるは分無きに非ず、
且盡青娥紅燭臺 且盡さん青娥の紅燭臺。

○七言律詩 長慶三年（八二三） 五二歳 杭州 杭州刺史

19 飲後夜醒。 1381

飲後夜醒む。

黃昏飲散歸來臥 黃昏飲散じ歸り來りて臥す、
夜半人扶強起行 夜半人扶けて強ひて起ち行かしむ。

樓前海月伴潮生 樓前の海月は潮に伴ひて生ず。

將歸梁燕還重宿 將に歸らんとする梁燕還重ねて宿し、

欲滅窗燈却復明 滅せんと欲する窗燈却つて復明かなり。

直至曉來猶妄想 直至曉來に至りて猶妄想す、

耳中如有管絃聲 耳中管絃の聲有るが如きを。

○七言律詩 長慶三年（八二三） 五二歳 杭州 杭州刺史

20 戲醉客 1403

醉客に戯る

莫言魯國書生懦 魯國書生の懦きを言ふこと莫れ、

莫把杭州刺史欺 杭州刺史を把りて欺くこと莫れ。

醉客請君開眼望 醉客請ふ君眼を開いて望め、

綠楊風下有紅旗 綠楊風下紅旗有り。

○七言絕句 長慶四年（八二四） 五三歳 杭州 杭州刺史

21 醉戲諸妓。 2341

酔うて諸妓に戯る。

席上爭飛使君酒 席上争ひ飛ばす使君の酒、

歌中多唱舍人詩 歌中多く唱ふ舍人の詩。

不知明日休官後 知らず明日官を休めて後、

逐我東山去是誰？ 我を東山に逐ひて去るものは是れ誰ぞ？

○七言絕句 長慶四年（八二四） 五三歳 杭州 杭州刺史

22 小院酒醒。 2375

小院酒醒む。

酒醒閑獨歩 酒醒めて閑に獨歩すれば、

小院夜深涼 小院夜深けて涼し。

一領新秋簾 一領新秋の簾、

三間明月廊 三間明月の廊。

未收殘盞杓 未だ残れる盞杓を收めず、

初換熱衣裳 初めて熱き衣裳を換ふ。

好是幽眠處 好し是れ幽眠の處、

松陰六尺牀 松陰六尺の牀。

○五言律詩 長慶四年（八二四） 五三歳 洛陽

太子左庶子分司

23 戲和賈常州醉中二絕句（その一） 2448

戲れに賈常州の醉中の二絶句に和す。

聞道毗陵詩酒興 聞道らく毗陵詩酒の興、

近來積漸學姑蘇 近來漸を積みて姑蘇を學ぶと。

罨頭新令從偷去 罨頭の新令偷み去るに従す、

刮骨清吟得似無？骨を刮く清吟似たるを得るや無や？

○七言絶句 宝曆元年（八二五） 五四歳 蘇州 蘇州刺史

24 戲和賈常州醉中二絶句（その二） 2449

戯れに賈常州の醉中の二絶句に和す。

越調管吹留客曲 越調の管は客を留むる曲を吹き、

吳吟詩送煖寒盃 吳吟の詩は寒を煖むる盃を送る。

娃宮無限風流事 娃宮無限風流の事、

好遣孫心暫學來 好し孫心をして暫く學び來らしむ。

○七言絶句 宝曆元年（八二五） 五四歳 蘇州 蘇州刺史

25 醉贈劉二十八使君 2522

酔うて劉二十八使君に贈る。

爲我引杯添酒飲 我が爲に杯を引き酒を添へて飲み、

與君把筯擊盤歌 君が與に筯を把り盤を撃つて歌ふ。

詩稱國手徒爲爾 詩は國手と稱せらるるも徒爲のみ、

命壓人頭不奈何 命は人頭を壓して奈何ともせず。

舉眼風光長寂寞 眼を舉ぐれば風光長く寂寞、

滿朝官職獨蹉跎 朝に滿つる官職獨り蹉跎たり。

亦知合被才名折 亦知る合に才名に折せらるべきを、

二十三年折太多 二十三年折せらるること太多し。

○七言律詩 宝曆二年（八二六） 五五歳 蘇州至洛陽途中

26 早飲醉中除河南尹敕到 2872

早飲醉中河南尹に除せらるる敕到る。

雪擁衡門水滿池 雪衡門を擁して水池に滿つ、

温爐卯後煖寒時 温爐卯後寒を煖むる時。

綠醅新酎嘗初醉 綠醅新酎嘗めて初めて酔ふ、

黃紙除書到不知 黃紙の除書到れども知らず。

厚俸自來誠忝濫 厚俸自來つて誠に忝濫、

老身欲起尚遲疑 老身起たんと欲して尚ほ遲疑す。

應須了却丘中計 應に須らく了却すべし丘中の計、

女嫁男婚三逕資 女嫁し男婚す三逕の資。

○七言律詩 太和四年（八三〇） 五九歳 洛陽 河南尹

27 醉中重留夢得 2789

醉中重ねて夢得を留む。

劉郎劉郎莫先起 劉郎劉郎先づ起つこと莫れ、

蘇臺蘇臺隔雲水 蘇臺蘇臺雲水を隔つ。

酒盞來從一百分 酒盞來り從ふこと一百分、

馬頭去便三千里 馬頭去れば便ち三千里。

○七言古詩 太和五年（八三一） 六十歳 洛陽 河南尹

28 水堂醉臥問杜三十一 2889

水堂に醉臥し杜三十一に問ふ。

聞君洛下住多年 聞く君洛下に住すること多年なりと、

何處春流最可憐？ 何の處の春流か最も憐むべき？

爲問魏王堤岸下 爲に問ふ魏王堤岸の下、

何如同德寺門前 同德寺門の前に何如ん。

無妨水色堪閑瓶 水色閑に瓶ぶに堪ふるを妨ぐるなきも、

不得泉聲伴醉眠 泉聲の醉眠に伴ふを得ず。

那似此堂簾幕底 那ぞ似かん此堂簾幕の底、

連明連夜碧潺湲 明を連ね夜を連ねて碧潺湲たるに。

○七言律詩 太和五年（八三一） 六十歲 洛陽 河南尹

29 醉吟 2895

醉吟

醉來忘渴復忘飢 醉來つて渴を忘れ復た飢を忘れ、

冠帶形骸杳若遺 冠帶形骸杳として遺るるが若し。

耳底齋鐘初過後 耳底齋鐘初めて過ぐる後、

心頭卯酒未消時 心頭卯酒未だ消えざる時。

臨風朗詠從人聽 風に臨んで朗詠して人の聽くに從せ、

看雪閑行任馬遲 雪を見て閑行して馬の遲きに任す。

應被衆疑公事慢 應に衆に公事の慢なるを疑はるべし、

承前府尹不吟詩 承前の府尹詩を吟ぜず。

○七言律詩 太和六年（八三一） 六一歲 洛陽 河南尹

30 醉後重贈晦叔 2910

醉後重ねて晦叔に贈る

老伴知君少 老伴は君が少きを知り、

歡情向我偏 歡情は我に向つて偏なり。

無論疎與數 疎と數とを論ずるなく、

相見輒欣然 相見ては輒ち欣然たり。

各以詩成癖 各々詩を以て癖を成し、

俱因酒得仙 俱に酒に因つて仙を得たり。

笑廻青眼語 笑つて青眼を廻らして語り、

醉竝白頭眠 酔うては白頭を竝べて眠る。

豈是今投分 豈是れ今分を投ぜんや、

多疑宿結緣 多く疑ふ宿より縁を結べるを。

人間更何事？人間更に何事ぞ？

攜手送衰年 手を攜へて衰年を送る。

○五言排律 太和六年（八三一） 六一歲 洛陽 河南尹

31 秋日與張賓客舒著作同遊龍門、醉中狂歌。凡二百三十八字。

2968

秋日張賓客・舒著作と同じく龍門に遊び、醉中狂歌す。

凡て二百三十八字。

1 秋天高高秋光清 秋天高高として秋光清く、

2 秋風嫋嫋秋蟲鳴 秋風嫋嫋として秋蟲鳴く。

3 嵩峯餘霞錦綺卷 嵩峯の餘霞錦綺巻き、

4 伊水細浪鱗甲生 伊水の細浪鱗甲生ず。

5 洛陽閑客知無數 洛陽の閑客知んぬ無數、

6 少出遊山多在城 出でて山に遊ぶこと少く多くは城に在り。

7 商嶺老人自追逐 商嶺の老人自ら追逐し、

8 蓬丘逸士相逢迎 蓬丘の逸士相逢迎す。

9 南出鼎門十八里 南鼎門を出づること十八里、

10 莊店遷池橋道平 莊店遷池橋道平なり。

11 不寒不熱好時節 寒からず熱からず好時節、

12 鞍馬穩快衣衫輕 鞍馬穩快衣衫輕し。

13 竝轡踟躕下西岸 轡を竝べ踟躕して西岸より下り、

14 扣舷容與遶中汀 舷を扣き容與して中汀を遶る。

15 開懷曠達無所繫 懷を開くこと曠達にして繫かる所無く、

16 觸目勝絕不可名 目に觸ること勝絶にして名く可からず。

17 荷衰欲黃苻猶綠 荷衰へて黄ならんと欲し苻は猶綠なり、

18 魚樂自躍鷗不驚 魚は樂みて自ら躍れども鷗は驚かず。

19 翠藻蔓長孔雀尾 翠藻蔓長ず孔雀の尾、

20 彩船槽急寒鷗聲 彩船槽急なり寒鷗の聲。

21 家醞一壺白玉液 家醞一壺白玉の液、

22 野花數把黃金英 野花數把黃金の英。

23 晝遊四看西日暮 晝遊四たび西日の暮るるを看、

24 夜話三及東方明 夜話三たび東方の明かなるに及ぶ。

25 暫停盃觴輟吟詠 暫く盃觴を停めて吟詠を輟めよ、

26 我有狂言君試聽 我に狂言有り君試に聽け。

27 丈夫一生有二志 丈夫一生に二志有り、

28 兼濟獨善難得并 兼濟獨善得て并せ難し。

29 不能救療生民病 生民の病を救療する能はずんば、

30 卽須先濯塵土纓 卽ち須らく先づ塵土の纓を濯ふべし。

31 況吾頭白眼已暗 況んや吾頭白くして眼已に暗し、

32 終日戚促何所成? 終日戚促何の成す所あらん?

33 不如展眉開口笑 如かず眉を展べ口を開きて笑ひ、

34 龍門醉臥香山行 龍門に醉臥して香山に行かんには。

○七言古詩 太和七年(八三三) 六二歳 洛陽

太子賓客分司

早春醉吟、太原の令狐相公・蘇州の劉郎中に寄す。

雪夜閑遊多秉燭 雪夜には閑遊して多く燭を秉り、

花時暫出亦提壺 花時には暫く出づるも亦壺を提ぐ。

別來少遇新詩敵 別來新詩敵に遇ふこと少に、

老去難逢舊飲徒 老い去つて舊飲徒に逢ひ難し。

大振威名降北虜 大に威名を振ひて北虜を降し、

勤行惠化活東吳 勤めて惠化を行ひて東吳を活す。

不知歌酒騰騰興 知らず歌酒騰騰たる興、

得似河南醉尹無? 河南の醉尹に似るを得るや無や?

○七言律詩 太和七年(八三三) 六二歳 洛陽

太子賓客分司

33 醉送李二十常侍赴鎮浙東 3087

醉うて李二十常侍が浙東に赴鎮するを送る。

靖安客舍花枝下 靖安の客舍花枝の下、

共脫青衫典濁醪 共に青衫を脱して濁醪に典す。

今日洛橋還醉別 今日洛橋に還た醉別し、

金杯翻汗麒麟袍 金杯翻して汗す麒麟の袍。

喧闐夙駕君脂轄 喧闐夙に駕して君轄に脂さす、

酪酎離筵我藉糟 離筵に酪酎して我糟を藉く。

好去商山紫芝伴 好し商山紫芝の伴を去つて、

珊瑚鞭動馬頭高 珊瑚鞭動いて馬頭高し。

○七言律詩 太和七年(八三三) 六二歳 洛陽

太子賓客分司

32 早春醉吟 寄太原令狐相公蘇州劉郎中 3061

34 醉別程秀才。 3088

醉うて程秀才に別る。

五度龍門點頭迴 五度龍門より點頭して迴る、

却縁多藝復多才 却つて多藝にして復た多才なるに縁る。

貧泥客路粘難出 貧は客路を泥して粘して出で難く、

愁鎖郷心掣不開 愁は郷心を鎖して掣すれども開かず。

何必更遊京國去 何ぞ必ずしも更に京國に遊び去らん、

不如且入醉郷來 如かず且つ醉郷に入り來らんには。

吳絃楚調瀟湘弄 吳絃楚調瀟湘の弄、

爲我殷勤送一杯 我が爲に殷勤に一杯を送れ。

(注) 程生善琴、尤能沈湘曲。程生琴を善くし、尤も沈湘曲

を能くす。

○七言律詩 太和七年(八三三) 六二歳 洛陽

太子賓客分司

35 藍田劉明府攜酎相過。與皇甫郎中卯時同飲。醉後贈之。

3107

藍田の劉明府酎を攜へて相過る。皇甫郎中と卯時に同じく飲み、酔後之に贈る。

臘月九日煖寒客 臘月九日煖寒の客、

卯時十分空腹杯 卯時十分なり空腹の杯。

玄晏舞狂烏帽落 玄晏舞狂して烏帽落ち、

藍田醉倒玉山頽 藍田醉倒して玉山頽る。

貌偷花色老暫去 貌は花色を偷みて老暫く去り、

歌隔柳枝春暗來 歌は柳枝を隔みて春暗に來る。

不爲劉家賢聖物 劉家賢聖の物の爲ならざれば、

愁翁笑口大難開 愁翁の笑口大に開き難し。

○七言律詩 太和七年(八三三) 六二歳 洛陽

太子賓客分司

36 家釀新熟、每嘗輒醉、妻姪等勸令少飲。因成長句以論之。

3121

家釀新に熟し、嘗むる毎に輒ち醉ふ、妻姪等勸めて少しく飲ましむ。因つて長句を成し以て之を論す。

君應怪我朝朝飲 君應に我が朝朝飲むを怪むなるべし、

不說向君君不知 說いて君に向はざれば君知らず。

身上幸無疼痛處 身上幸に疼痛の處無し、

甕頭正是堂嘗時 甕頭正に是れ堂嘗する時。

劉妻勸諫夫休醉 劉が妻勸め諫めて夫醉ふことを休め、

王姪分疏叔不癡 王が姪分疏して叔癡ならず。

六十三翁頭雪白 六十三翁頭雪のごとく白し、

假如醒點欲何爲? 假如醒點するも何を爲さんと欲する?

○七言律詩 太和八年(八三四) 六三歳 洛陽

太子賓客分司

37 夜宴醉後留獻斐侍中。 3187

夜宴醉後、留めて斐侍中に獻す。

九燭臺前十二妹 九燭臺前十二の妹、

主人留醉任歡娛 主人留め醉はしめて歡娛するに任す。

翩翩舞袖雙飛蝶 翩翩たる舞袖雙飛の蝶、

宛轉歌聲一索珠 宛轉たる歌聲一索の珠。

坐久欲醒還酩酊 坐すること久しく醒めんと欲して還た酩酊し、

夜深初散又踟躕 夜深け初めて散ぜんとして又た踟躕す。

南山賓客東山妓 南山の賓客東山の妓、

此會人間曾有無？此會人間曾て有りや無や？

○七言律詩 太和八年（八三四） 六三歳

洛陽 太子賓客分司

38 長齋月滿、搯酒先與夢得對酌。醉中同赴令公之宴、戲贈夢

得。 3288

長齋月滿ち、酒を搯へて先づ夢得と對酌し、醉中同じく
令公の宴に赴き、戯れに夢得に贈る。

齋宮前日滿三句 齋宮前日三句に滿つ、

酒榼今朝一拂塵 酒榼今朝一たび塵を拂ふ。

乘興還同訪戴客 興に乗じて還た戴を訪ふ客に同じ、

解醒仍對姓劉人 醒を解き仍は劉を姓とする人に對す。

病心湯沃寒灰活 病心湯沃ぎて寒灰活き、

老面花生朽木春 老面花生じて朽木春なり。

若怕平原怪先醉 若し平原の先づ醉ふを怪むを怕るれば、

知君未慣吐車茵 知る君が未だ車茵に吐くに慣れざるを。

○七言律詩 開成一年（八三六） 六五歳

洛陽 太子少傅分司

39 晚春酒醒尋夢得。 3315

晚春酒醒めて夢得を尋ぬ。

料合同惆悵 料るに合に同じく惆悵すべし、

花殘酒亦殘 花殘して酒亦殘す。

醉心忘老易 醉心は老を忘るること易きも、

醒眼別春難 醒眼は春に別るること難し。

獨出雖慵懶 獨り出づるは慵懶なりと雖も、

相逢定喜歡 相逢はば定めて喜歡せん。

還攜小蠻去 還た小蠻を攜へ去りて、

(注) 小蠻、酒榼名也。小蠻は、酒榼の名なり。

試覓老劉看 試みに老劉を覓めて看ん。

○五言律詩 開成二年（八三七） 六六歳

洛陽 太子少傅分司

40 燒藥不成、命酒獨醉。 3327

藥を焼いて成らず、酒を命じて獨り醉ふ。

白髮逢秋王(注) 去声 白髮秋の王するに逢ひ、

丹砂見火空 丹砂火の空しきを見る。

不能留姮女 姮女を留むる能はず、

爭免作衰翁 争でか衰翁と作るを免れん。

頼有杯中綠 頼に杯中の綠有り、

能爲面上紅 能く面上の紅を爲す。

少年心不遠 少年心遠からず、

只在半酣中 只半酣の中に在り。

○五言律詩 開成二年（八三七） 六六歳

洛陽 太子少傅分司

41 分司洛中多暇。數與諸客宴遊。醉後狂吟、偶成十韻。因招

夢得賓客。兼呈思黯奇章公。 3335

洛中に分司たるとき暇多し。數諸客と宴遊す。醉後狂吟して、偶々十韻を成す。因つて夢得賓客を招き、兼ねて

思黯奇章公に呈す。

性與時相遠 性と時と相遠く、

身將世兩忘 身と世と兩ながら忘る。

寄名朝士籍 名を朝士の籍に寄せ、

寓興少年場 興を少年の場に寓す。

老豈無談笑 老いて豈談笑無からんや、

貧猶有酒漿 貧しきも猶ほ酒漿有り。

隨時求伴侶 時に隨つて伴侶を求め、

逐日用風光 日を逐うて風光を用ふ。

數數遊何爽? 數數として遊ぶこと何ぞ爽はん?

些些病未妨 些些として病むも未だ妨げず。

天教榮啓樂 天は榮啓をして樂ましめ、

人怨接輿狂 人は接輿の狂を怨す。

改業爲通客 業を改めて通客と爲り、

移家住醉郷 家を移して醉郷に住す。

不論招夢得 夢得を招くを論ぜず、

兼擬誘奇章 兼ねて奇章を誘はんと擬す。

要路風波險 要路は風波險に、

權門市井忙 權門は市井忙し。

世間無可戀 世間には戀ふ可きこと無し、

不是不思量 是れ思量せずんばあらず。

○五言排律 開成二年(八三七) 六六歲 洛陽

太子少傅分司

42 和思黯居守獨飲偶醉見示六韻。時夢得和篇先成、頗爲麗絕。

因添兩韻、繼而美之。 3518

思黯居守が獨飲偶醉、六韻を示されしに和す。時に夢得の和篇先づ成り、頗る麗絶となす。因つて兩韻を添へ、

繼ぎて之を美す。

宮漏滴漸闌 宮漏滴ること漸く闌なり、

城烏啼復歇 城烏啼いて復歇む。

此時若不醉 此時若し醉はずんば、

爭奈千門月! 千門の月を爭奈せん!

主人中夜起 主人中夜に起くれば、

妓燭前羅列 妓燭前に羅列す。

歌袂默收聲 歌袂黙して聲を收め、

舞鬟低赴節 舞鬟低れて節に赴く。

絃吟玉柱品 絃吟じて玉柱品あり、

酒透金杯熱 酒透りて金杯熱し。

朱顏忽已酡 朱顏忽ち已に酡たり、

清奏猶未闌 清奏猶未だ闌らず。

妍詞黯先唱 妍詞黯先づ唱へ、

逸韻劉繼發 逸韻劉繼ぎて發す。

鏗然雙雅音 鏗然たる雙雅音、

金石相磨戛 金石相磨戛す。

○五言古詩 開成三年（八三八） 六七歳 洛陽

太子少傅分司

また、五言詩七首（五律四首、五排二首、五古一首）に比して、七言詩三十五首（七絶十六首、七律十四首、七古五首）は五倍の作品数である。圧倒的多数であると言える。

三 作品論

三、一 作品制作年代概観

作品の制作年代を見ると、次のようになっている。

*三十代（三十六～三十八歳）

盤屋県尉、長安……………五作品

*四十代（四十四～四十九歳）

長安、江州司馬、忠州刺史……………八作品

*五十代（五十～五十九歳）

長安、杭州刺史、蘇州刺史、洛陽、旅途……………十三作品

*六十代（六十～六十七歳）

洛陽、河南尹、太子賓客分司、太子少傅分司……………十六作品

右を詩体別に表にすると次のようになる。

年代・五律・五排・五古・七絶・七律・七古・合計

*三十・ 〇・ 〇・ 〇・ 四・ 〇・ 一・ 五

*四十・ 一・ 〇・ 〇・ 六・ 一・ 〇・ 八

*五十・ 一・ 〇・ 〇・ 六・ 四・ 二・ 十三

*六十・ 二・ 二・ 一・ 〇・ 九・ 二・ 十六

合計・ 四・ 二・ 一・ 十六・ 十四・ 五・ 四十二

これを見ると、五十代、六十代に多い。特に洛陽での作品が目立って多い。

三、二 制作の状況

作品は通し番号順に（制作年代順に）分類する。また、（一）内に作品番号を示す。状況については、以下のように分類した。なお、作品の主旨を示す。

【1】「酔」について

【2】「酔中」について

【3】「酔後」について

【4】「酒醒」について

【1】「酔」についての作品

ここには三首を分類した。

11・東樓酔（1143）

四十八歳の作。辺鄙な忠州にいたので、酔わなければ過

ごされない。

36・家釀新熟每嘗輒酔妻姪等勸令小飲因成長句以諭之。

（3121）

六十三歳の作。お前たち、私は白髪の老人で、何も出来ない。飲んで達者でいる方がよいのだよ。

40・燒葉不成命酒独酔（3327）

六十六歳の作。仙葉は効果が無い。酒によって半酔し、

少年の心に戻るのである。

11は、酒によって佻しさを紛らわせている。36は、飲み助が、飲むために屁理屈をいつている感じがある。40は、老いを悟っている。心底から寂しいのであろう。

作者は安定した地位に在るのであるが、佻しさや寂しさを感じている。この三篇は、それを酒によって紛らわせていることを示している。

【2】「酔中」についての作品

ここには「酔中」十一首、「酔吟」五首、その他八首、合計二十四首を分類した。

「酔中」といつても「酔後」といつても酔っていることに大差はないが、一応用語によって分ける。また、酔中にどうしたか、ということを見る。

1・崑南花下酔中留別五(0640)

三十六歳の作。花の盛りだ。共に酔うこともめつたにな
い。夜までつき合えよ。

2・酔中留別楊六兄弟(0642)

三十六歳の作。春の初めから、共に遊んだ。君らと別れ
たら誰と酔えるだろうか。春はあと十日もあるのだ。

3・酔中婦盤屋(0643)

三十六歳の作。牡丹の花見をして、散ってから、酔中を
帰って来た。

8・酔中戲贈鄭使君(0988)

四十六歳の作。二次会になった。酔いも醒めて、少年時
代の酔興が、今日復活した。

18・酔中酬殷協律(1368)

五十二歳の作。二十年前に別れた友人と都から三千里離れ
た浙江で遊ぶことになった。夜まで、十分に酔おう。

23・戲和賈常州酔中絶句1(2448)

五十四歳の作。賈君はいくら頑張っても骨を刮く私の清
吟は真似られまい。(自負心が見える)

24・戲和賈常州酔中絶句2(2449)

五十四歳の作。私は、風流韻事を恣にしている。君は自
由に私のやることを真似しなさい。(自負心が見える)

26・早飲酔中除河南尹勅到(2872)

五十九歳の作。朝酒を飲んでいるところへ河南尹に任ず
る勅書が来た。生活に余裕が出来る。有り難いことだ。

27・酔中重留夢得(2789)

六十歳の作。劉禹錫が赴任する。蘇州は三千里の彼方だ。
君よ、出立は急がずにこの酒を飲め。

31・秋日与張賓客舒著作同遊龍門酔中狂歌凡百三十八字

六十二歳の作。張、舒と遊び、酔って狂歌した。兼濟が
駄目なら独善を実行せよ。しかし、もう老境に入って何も
出来ないのだから、行楽酔臥するのがよいぞ。

38・長齋月滿携酒先与夢得对酌酔中同赴令公之宴戲贈夢得

六十五歳の作。劉と飲んだ後、裴度の宴へ行った。劉禹
錫よ、びくびくせず飲めばよい。

ここに上げた作品は、3、26、以外の作品は相手があって作

っている作品である。制作年代は、1、2、3、は、気鋭の三十代の作品。8は、不遇の時代の作品であるが、他は全て刺史、河南尹時代の作品である。

醉中どうしたかを見ると、作者の態度が能動的なものと受動的なものに分けられる。

一、能動的なもの

a、身体の行動を示すもの

3・醉中婦(0643)

b、作詩活動を示すもの

1・2・醉中留別(0640、0642)

27・醉中重留(2789)

31・醉中狂歌(2968)

8・38・醉中戲贈(0988・3288)

18・醉中酬(1368)

23・24・戲和・醉中(2448・2449)

二、受動的なもの

26・醉中・勅到(2872)

一、bは全て相手がある詩である。詩人としての面目は、この作詩活動に伺われる。そして、これらの作品は、考え方がみな明るい。

なお、23、24に白居易の自作品に対する自負心が見える。また、38では、壮年の頃の主張である兼濟・独善も実行できない。年には勝てないと言っている。

「醉吟」

ここには五首を分類した。

9・醉吟(1064)

四十七歳の作。仏教、道教共に老化防止の効果がない。酒の力によって酔うより他はない。

10・醉吟(1065)

四十七歳の作。白髪が乱れる。泥酔しようと思う。酒狂が詩魔を喚起した。昼から夕方まで悲吟している。

29・醉吟(2895)

六十一歳の作。酔って飢喝を忘れ、役人の身分を忘れる。朗吟し、雪見に出かける。世間の人は公務を怠っていると思うだろう。これまでの河南尹は詩など吟じなかったから。

32・早春醉吟寄太原令狐相公蘇州劉郎中(3061)

六十二歳の作。令狐楚と劉禹錫に寄せた。令は北虜を平らげ、劉は蘇州の民を救った。共に立派だ。しかし、歌酒の興を恣にしている点では、僕には及ぶまい。

42・和思黯居守独吟偶醉見示六韻時夢得和篇先成頗為麗絶

因添兩韻繼而美之。(3518)

六十七歳の作。夜中に起き目を覚まし酒を酌む。妓女も舞い、主人(牛僧孺)は酔うた。主人が詩を作り、劉禹錫が和した。私は二つの詩とも金石の韻を発する麗詩だとおもう。

ここに上げた作品は、四十七歳以降の、刺史以上の地位での作品ばかりである。

「醉吟」の題の作品を類似の題名毎に左にまとめる。

9・10・29・醉吟(1064、1065、2895)

32・醉吟寄(3061)

42・独吟・醉見示・添両韻繼美之(3518)

いずれの作品も、生活に余裕があつて、酔いを楽しんでいる感じがある。

「その他」

以下の作品は、「酔中」の作品であるが、一表題に一作品づつであるので、列挙した。八首である。

酔憶

5・同李十一醉憶元九(0710)

三十八歳の作。李建と酒を飲み、遊んだ。ふと元稹が遠方を旅しているのだ、今日は梁州あたりへ着いたであろう、と思つた。

酔歌

16・酔歌0607

五十二歳の作品。衰老は酔歌して楽しむ以外に方法がない。私の歌が終わつたら、玲瓏よ、お前が代わつて歌つてくれ。

酔作

17・候仙亭同諸客酔作(1352)

五十二歳の作。昔の謝安も柳惲も、候仙亭で花を嘲り水を詠じて美妓に贈る楽しみをしている私には及ぶまい。

酔酔客

20・酔酔客(1403)

五十三歳の作。儒者、杭州刺史を馬鹿にしてはいけない。酔客よ、楽天が紅旗を振つて数多の船を指揮しているのを見るであろう。

酔戯

21・酔戯諸妓(2341)

五十三歳の作。芸者たちよ、酒席では先を争つて盃をさし、私の作つた詩を歌うが、免職になったら誰が私と一緒に隠居所へ来てくれるのだ？

酔臥

28・水堂酔臥問杜三十一(2889)

六十歳の作。水際のあずまやに酔つて寝て杜三十一に問う。春の風情では、寝ながら泉声を聞ける我が水亭が一番だと思ふがどうか？

酔送

33・酔送李二十常侍赴鎮浙東(3087)

六十二歳の作。李紳が浙東觀察使となつて赴任する。昔青衫を質に入れて飲んだこともあったが、今日洛橋で酔つて見送る。君は颯爽と去つて行く。

酔別

34・酔別程秀才(3088)

六十二歳の作。五回も落第したのは、多芸多才の爲である。今更試験など受けることはない。君は音楽に優れているのだ。一曲弾いて私に一杯の酒をくれたまえ。

ここに上げた作品も、気楽な立場での作品であることが分かる。20以外の作品からは、白居易の政治家としての姿勢は伺えない。

【3】「酔後」についての作品

こには十二首を分類した。

4・酔後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季

(0584)

三十七歳の作。知り合ったとき私は二十歳、劉君は三十歳で、よく一緒に遊んだ。私は志を立てて長安へ入った。張君・賈君、弟らが来て、十年間で五人が九回及第した。沅犀だけは及第できなかった。元和になって、私は出世して禁中に入った。天子のお側近くに仕え天書を草した。旧友の劉五が来た。江東に遊んで日を送ろうという考えであった。君は一編の行路吟をくれた。私のような短才が用いられて長才の君が用いられない。しかし、私は推薦するこゝとが出来ない。諫奏文二百枚を草し、俸錢三十万を頂くの恥じる。まあ、斗酒を傾け、旅愁を慰め、故郷の符離の昔話をしよう。故郷の風景は昔と変わらず美しいであろう。こんなことを感じ、この詩を作つて君に酬いる。朱買臣の例もある。焦らず、体を大切にしない。

6・曲江酔後贈諸親故(0831)

四十四歳の作。天上には仙薬が有るかも知れないが、下界には不死の人など居はしない。私は酔つて笑う以外、世間のことには頓着しない。共に大いに酒を飲むべきだ。

7・酔後却寄元九(0836)

四十四歳の作。蒲池村で君を送り、長安の城門まで来ると酒が醒めてしまつて、君との別れの寂しさが一時にこみ上げて来た。

12・酔後戲題(1146)

四十八歳の作。日頃は氷のような枯淡な生活をしているので禪僧のように言われている。今夜は一杯飲んで綾衣にくるまって寝たので玉壺の水が解けたような気がする。

13・酔後贈人(1174)

四十九歳の作。愉快な宴会だ。春から一度も一緒に飲んでいない。先に帰るな、夜の更けるまで楽しもう。

14・酔後(1224)

五十歳の作。飲んだら歌つてふざけるのもいい。世間のことなど気に掛けるな。下戸が醒めてしまつて酔っていないのは、面白くない。

15・酔後狂言酬贈蕭殷二協律(0606)

五十一歳の作。(一、十六句)余杭県に来てはいる客の中、蕭・殷二君は甚だしく貧窮している。杭州太守の自分は、重衣複裘の暖を貪るのを恥じ、呉綿と桂布で作つた両裘を作つて二君に贈つた。二君は詩を作つて私に謝意を表した。(十七、二十四句)私には広く暖かなこと陽春のような大きい裘を持っている。法度を用いて裁し、仁を用いて綿としたものである。作り方が拙くてまだ出来上がらないが、杭州刺史の任期を五年くれれば杭州の人民全部を暖かく包むであらう。

25・酔贈劉二十八使君(2522)

五十五歳の作。君は詩の方は名人であるが、身のためには役に立たない。才名が仇を為して立身の妨げを為しているのである。

30・酔後重贈晦叔(2910)

六十一歳の作。君の老友の私は、君を年少扱いするが、君はいつ会っても気持ちがいい。共に詩を作り、酒を飲み、白頭を並べて眠る。前世からの宿縁があつたのではないかと思われる。共に老年を送つていこう。

35・藍田劉明府携酌相過与皇甫郎中卯時同飲酔後贈之

(3107)

六十二歳の作。劉県令が酒を持って来たので皇甫湜と朝酒を飲み、皆老衰を忘れ、柳枝の曲を歌つて楽しんだ。君のお陰である。

37・夜宴酔後留獻裴侍中(3187)

六十三歳の作。夜宴に九個の燭台があり、十二人の美女が居る。裴度は客を留め楽しませる。南山の客と東山の妓とのようなこんな盛会が人の世に又とあつたであらうか。

41・分司洛中多暇數与諸客宴遊酔後狂吟偶成十韻因招夢得賓客兼呈思黯奇相公(3335)

六十六歳の作。朝官の末に名を連ね、若い者の遊び仲間に興味を持っている。老いて貧しくとも資金はあり飲めるから、毎日遊び相手を求めている。今日は隠者となつて酔っている。劉禹錫、牛僧孺も呼ぼうと思う。世間に私の気を引くものはない。貴公たちも私の処へ来て楽しまれよ。この作品は、類似的題名毎にまとめると左ようになる。

14・酔後(1224)

15・酔後狂言酬贈(0606)

41・酔後狂吟・呈(3335)

25・酔贈(2522)

6・13・35・酔後贈(0831, 1174, 3017)

30・酔後重贈(2910)

7・酔後却寄(0836)

4・酔後酬(0584)

12・酔後戲題(1146)

37・酔後留獻(3187)

25は「酔中」でも「酔後」でも良いが、ここに分類した。なお、この詩は、14以外は全て相手がある作品である。

4には白居易の出世ぶりがさりげなく書かれている。誇る気持ちが見え隠れする。15の後半は、白居易の政治姿勢と抱負を示している。25の詩の劉禹錫は詩才が災いして出世しないだろうという表現は注目される。他の詩は、生活の余裕を感じさせる詩であり、友人との交際の楽しさが伺えるものである。

【4】「酒醒」についての作品

ここには三首を分類した。

19・飲後夜醒(1381)

五十二歳の作。夕方宴会がはねてから帰って寝た。夜中、家人が助けて床に寝かせてくれた。床に就いてから、酔いも醒め、楼前の海月を眺めた。帰らんとする梁上の燕も宿り、夜明けまで、管弦の音が聞こえるように思われた。

22・小院酒醒(2375)

五十三歳の作。三間の廊下を明月が照らす。敷物の上には散らかった盃と柄杓があるが、片付けもせず、夏着に着

替えた。松の陰の六尺の寝台の上に眠り、醒めた後、庭を散歩した。

39・晩春酒醒尋夢得(3315)

六十六歳の作。花も散り酒気も衰えたのは共に悲しむところ。酔っている時は老いを忘れるが、醒めていると春に別れるのが惜しい。一人出かけるのは億劫だが、会えばまた楽しかろうと思つて酒を持って君を訪ねて来たのだ。

この作品は、淡白で明るい。酔い醒めには、人生の佻しき、寂しさやかなさを感じたりするものであるし、それが歌われることも多いのであるが、ここにはそれは見えない。

三、三 作品制作の目的

本稿で取り上げた四十二首の制作の目的は、次の三つに分けられる。

(一)、「独吟」(一人の思いを表現したと見られる詩)

十三首。

3・醉中掃(0643)、5・醉憶(0716)、9・10・29・醉吟(1064、1065、2898)、11・醉(1143)、12・醉後戯(1146)、14・醉後(1124)、17・醉作(1352)、19・夜醒(1381)、22・酒醒(2375)、26・醉中除・勅到(2872)、40・独醉(3327)。

(二)、「寄贈」(相手を想定、又は贈呈したと見られる詩)

二十五首

1・2・醉中留(0640・0642)、4・醉後・酬(0

584)、6・醉後贈(0831)、7・醉後却寄(0836)、8・醉中戲贈(0988)、13・醉後贈(1174)、15・醉後狂言酬贈(0606)、16・醉歌(0607)、20・戲醉客(1403)、21・醉戲(2341)、25・醉贈劉(2522)、27・醉中重留(2789)、28・醉臥間(2889)、30・醉後重贈(2910)、31・醉中狂歌(2968)、32・醉吟寄(3061)、33・醉送(3087)、34・醉別(3088)、35・醉後贈(3107)、36・醉・論(3121)、37・醉後留獻(3187)、38・醉中・戲贈(3288)、39・酒醒尋(3315)、41・醉後狂吟・呈(3335)。

(三)、「酬和」(他人とやり取りをした詩) 四首。

18・醉中酬(1368)、23・24・戲和・醉中(2448・2449)、42・独飲偶醉見示・添兩韻(3518)

右の(二)、(三)を合わせると二十九首で、全体数の約69・5パーセントを占める。

この面から見ても、「醉」の詩は、交際を主目的とした詩、又は、それを表現した詩、であることが分かる。

四 結 語

○「唐詩類苑」で最も多くの「醉」の詩を収められている詩人は、白居易で、四十二首を数える。

○作品の制作年代は、五十代、六十代が多い。制作場所では、

洛陽の作品が目立って多い。そして、七言詩が五言詩の五倍もある。これは、五言詩よりも七言詩の方が、言数が多い分だけ表現したい内容を盛り込みやすく、またリズムカルであったのであろうと思われる。

○作品制作の状況は、「醉」についてが三首、「醉中」についてが二十四首、「醉後」についてが十二首、「酒醒」についてが三首で、これらの詩は、いずれも政治的色彩が薄く、明るい。○作品制作の目的は、相手を想定しているものが七割を占める。交際、又はその表現を目的として作られていることが分かる。

これは、洛陽は副都であり、長安のような忙しさは無く、生活が、物質的にも精神的にも安定していた為であろう。また、白居易の楽天的な性格のせいでもあると考えられる。

○そして、「醉吟先生伝」は、正にかかる生活の中で作られているのである。

「醉吟先生伝」では、白居易は「前略」家貧なりと雖も、寒餓に至らず、年老いたりと雖も、未だ毫に及ばず。性酒を嗜み、琴に耽り、詩に淫す。凡そ酒徒、琴侶、詩客多く之と遊ぶ。遊ぶの外、心を釈教に棲まし、小中大乗の法を通学す。崇山の僧如満とは空門の友たり。平泉の客韋楚とは山水の友たり。彭城の劉夢得とは詩友たり。安定の皇甫朗之とは酒友たり。一たび相見る毎に、欣然として帰るを忘る。(中略)長吁太息して曰く、吾天地の間に生まれ、才と行と古人に逮はざること遠し。而るに黔婁よりも富み、顔淵よりも寿に、伯夷よりも飽き、榮啓期よりも楽しみ、衛叔宝よりも健なり。幸甚幸甚。余は何を

か求めんや。若し吾が好む所を捨つれば、何を以てか老を送らんと。因つて自ら詠懐の詩を吟じて云く、「琴を抱きて榮啓が楽しみあり、酒を縦にして劉伶が達あり。眼を放ちて青山を看頭、白髪を生ずるに任す。知らず天地の内、更に幾年か活くるを得る。此より身を終わるに到るまで、尽く閑日月と為さん。」

と。(注4)吟じ罷めて自ら晒ひ、麈を掲げ醜を撥して、又数杯を引き、兀然として酔ふ。既にして酔ひ復た醒め、醒めて復た吟じ、吟じて復た飲み、飲みて復た酔ひ、酔吟相仍り、循環の若く然り。是に由りて以て身世を夢にし、富貴を雲にし、天地に幕席し、百年を瞬息するを得、陶陶然たり、昏昏然たり、老の將に至らんとするを知らず。古の所謂全きを酒に得る者なり。故に自ら号して醉吟先生と為す。(下略)と述べている。

この伝で述べることは、「醉」の詩の世界を、つまり「醉」の哲学を、散文を用いて示しているものである。

白居易の「醉」の詩は、正に白楽天の「天を樂しむ」生き方をそのままに反映したものであると言えるのである。

注記

(注1)「唐詩類苑」張之象編 汲古書院 平成七年版。

なお、白居易の詩の「唐詩類苑」での収録実詩数eは二七六首で、「全唐詩」「全唐詩外篇」の収録詩数fは二八九六首である。f分のeの収録率は、九六・二パーセントである。(同書の六十頁を参照)

(注2) テキスト・『白居易集箋校』(全六冊) 朱金城箋校、中国古典文学基本叢書、中華書局、一九八八年刊。

(注3) 篇名、作品番号、詩体、制作年、年齢、地位、等は主として『白氏文集の批判的研究』花房英樹著 朋友書店、昭和四十九年(再版本)による。また、一部は、右に上げたテキストによる。

(注4) 「抱琴榮啓樂、縦酒劉伶達。放眼看青山、任頭生白髮。不知天地内、更得幾年活。從此到終身、尽為閑日月。」は「洛陽有愚叟」(3005)の全二十四句の十七、二十四句を引用している。

以上、一九九八年十二月中旬、記るす。大尾。

(上越教育大学教授)